コラム

みやちゃんとご一緒体験記

Vol.55

予期せぬ妊娠・出産についての考察

先日HDDの整理をしていたら、随分昔に鑑賞して書いたシネマレビューを当時のことを懐かしく思い出しながらよみました。ある時期から映画関連の仕事をしていないので、試写室通いをしておらず、劇場にもあまり足を運ばなくなっているのるのが現状。2006年1月劇場公開された日本映画「三年身籠る」という作品のマスコミ試写を見たのは、おそらく2005年11月頃。ちょうど、前のコラム（VOL.54 「性と生殖に関する健康と権利」再考）を書いた後、「望まぬ妊娠」云々について触れたため、その結果うまれた子どもが「予期せぬ妊娠で生まれた、望まれない子どもだ」とネガティブ思考に陥ることがないかと危惧していたからか、この作品に目がとまった次第。ということで20年近く前、自身のブログにかいたシネマレビューを（少し修正して）ご紹介させていただきます。

★「三年身籠る」 https://eiga.com/movie/41588/

～～～

本作は、お腹の中に赤ちゃんが3年間も籠った物語だ。出産時期を過ぎたのに生まれない話は聞いたことはあるが3年間となると異常だ。これはもう、完全に赤ちゃんサイドの意思としか思えない。出産は、この世に出ようとする赤ちゃんの意思と、生み出してやろうとする母親の共同作業だ。本作は、何かの理由で母体に引きこもり体内で発育する赤ちゃんを抱えた主人公・冬子（中島知子）とその家族の飄々としたユーモア溢れるメルヘンチックな物語だ。

郊外の古風な一軒屋に住む妊婦の冬子は夫の徹（西島秀俊）と2人暮し。ぼんやりした温厚な性格の冬子と夫は、まだ親になる実感がない。さらに冬子は、（妻が妊娠中だというのに）夫が浮気していることを察知しているが慌てずのんびり構えている。
時々、実家にご飯を食べに行く。冬子の実家は女系家族だ。祖母と母（木内みどり）と妹の緑子（奥田恵梨華）が揃うと、女だけの豪華な食卓は賑わう。女達が集まってモノを食うシーンの贅沢さ！　子どもを産むという女性だけの営み同様、毎日かかせないモノを食うという行為。さりげない日常の描写の中に女性の生理的逞しさを垣間見て楽しい。

冬子の父親の存在は一切語られない。時々、冬子はせっせと投函しないのに父親宛てに手紙を書いている。多分、この家族にとって男は添え物。猫のように子孫を増やすためにだけ男を必要としてきたかのようだ。
それが明確になるのは、冬子の出産が延びてお腹が異常にせりだしているのに、祖母と母は、「育児しなくてよくてラクねー」なんて心配もせずノホホンとしたことを言い、「生まれてくるのは女の子よ」と言うあたりだ。深刻な問題なのに飄然としている家族の反応がオカシイ。さらに、夫の徹は「自分以外のエイリアンと性交したから不自然な形になっている」と真面目な顔をして言い出したりする。当の冬子も自分が望んだことかもしれない、と思ったりする。
ともあれ、異様な形になり動くのも大変、見た人たちにはギョッとされ、冬子の妹・緑子の恋人・海（塩見三省）の勤務先の病院に入院させられさらし者になったりする。いたたまれなくなり、人目をさけるために山奥の静かな別荘に移り出産の時を待つ徹と冬子。日ごとに成長する体内の赤ちゃんは時折お腹を蹴ったり、腹の中で泣き声をあげたりする。

赤ちゃんは永遠に出てこないのだろうか？　東京から見舞いにきた緑子と海はなんだかギクシャクしている。姉とは対称的な性格の緑子は奔放で感情的で欲望のままに行動する。ちょっとヒステリーで理屈っぽい美人だ。姉の見舞いにきていながら、恋人とうまくいかないからか義兄の徹を誘惑してしまう。優柔不断な徹は拒絶したもののちゃっかり受け入れてしまう。のんびりしているようで何でもお見通しの冬子は静かな、

だが手厳しい方法で緑子を罰する。そして、ついに陣痛が始まった……。
誰でも性交し、妊娠し、出産することは可能だ。許可などいらない。しかし、精神が未熟なまま親になることは動物だってできる。性の倫理が希薄になった現在、親になるという自覚と親業をなすべき責任感をもった精神的に成熟した大人が親になっているかというとそうではないようだ。大人化していない大人たちに子どもが反旗を翻し、自分で親となる人を＜選んだ＞赤ちゃんと、予期せぬ異常妊娠によって家族のあり方や愛情の形を＜考察＞した母親の共同作業とみるべきか。不思議に印象に残る作品だ。
～～～